


 続
徒然
つれづれ

「地方」の元気力に期待

桑野 巍

旅先の土産物店で「地方発送承ります」の貼紙を見かけることが多い。この場合の「地方」というのは恐らくこの土地以外の他の地域という意味だとわかっている、何だかこの「地方」が気に懸かる。そこで念のために店員に「地方とはどこか」と聞いてみた。店員はこの店が中央とは言わず「他の地方、地域のこと」と教えてくれた。店員はさして意識していないようで「地方」はよく使う言葉、一個でも多く売りたいと正直だった。

次は意識せざるを得ない地方公務員一年生の研修後の感想文に接した。彼はあらゆる角度から地方自治、地方行政などを学んだあと研修担当から研修終了後に感想文を求められた。学校の授業と全く異なった“勉強”を短期間に詰め込み、彼は自分流に綴った。

私たちの毎日の生活は地方自治と切っても切れない関係ということがわかった。この世に生まれると先ず市町村役場へ出生届を出す。これがその後の長い人生における社会生活の出発点となり、地方自治との深い関係が始まる第一歩となる。私たちの毎日の生活とは住宅、交通、土地、消防、衛生、民生、教育、警察、文化などの自治行政を通して地方自治とは深いつながりを持つ。

ところが都市は過密化し、農山村は過疎化し、住民と役所との結びつきが薄れつつある。また、文明の利器の急速な発達で住民の生活圏が拡大してきたし、地域住民とはいいながら別の市町村に長期滞在するなど、住民の流動性が強まっているので問題、課題が多い。どういう部課に配属されようとも自分の持てる力を発揮して役立つ職員になりたい（後略）。研修担当者によると、新入職員は与えられる職場に向かう前から意気揚々としており、みんな“希望の星”と見受けたそうだ。

一方、多くの企業は「人材こそ財産」として厳しい研修を試みる。一定の研修を終えると全国規模の企業であれば新人は各地に配属されることになる。地方出身なのに首都圏の本社勤務となる社員、首都圏出身なのに地方勤務を命じられる人など、社会人としてのスタートは様々だ。別段気遣う必要はないのだが、地方勤務を命じられた新人の「地方」とい

う言葉が気に懸かった。この人たちには“都落ち”という感情はないだろうが、田舎者になると錯覚したり「何で」と評る向きの若者もいると聞いた。今時「地方」は交通の便もよく、文化水準も首都圏と同程度なのだから地方勤務者も田舎者扱いにされることを恥なくてもよいと思うのである。

最近でこそ地方分権とか地方主権という言葉が頻繁に目にするようになったから「地方」に気を遣ったり、意識過剰になってはならないと思いつつ、手元の辞書をめくってみた。「地方」の項目は予想以上にスペースを割いていることがわかった。①全体社会の一部を構成する地域②首都以外の土地③いなか（「中央」の対義語）④旧軍隊用語で軍以外の社会などと書いてある。そのあと、「地方」がつく地方官庁、地方議会、地方機関、地方行政などが説明しており、地方分権の項では権力を中央統治機関に集中させずに地方の自治団体に広く分散させること、とあった。このスペースを読んではいままさらながら「地方」はいろんな表情をもっているな、と思った。

「地方ー中央」は対義関係であるものの天気予報では「今日の東京地方は雨」のように使われるから、東京は中央であると同時に「東京も地方の一つ」と思ったりもした。行政関係では中央省庁に対して地方公共団体というから、東京都も地方団体であって大阪府、神奈川県あるいは大阪市、横浜市などと横並びの存在なのだ。

もっとも東京都以外はすべて「地方」と呼ぶ人はいまも結構多い。感覚的な「地方」の捕え方がそうしているのだろうが、「あまり『地方』にこだわる必要はない」が私の結論だ。地方同士の人の会話でも相手方がいう「地方」と自分がいう「地方」が一致しない事もあるくらいで、「地方」という言葉は広くて得体が知れない言葉と考えた方がよい。

要はどの地方自治体も甘えを捨て、高い志を持ち「わがまちは住みよい所」「住んでみたい所」的な競争を展開し、地方の元気力増進策に取り組んでほしいのだ。

（自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長）